

業を受けている。該当児童には、WISC - 指導に生かしている。

ウ チャレンジルームの授業

チャレンジルームは学力を上げる場所や特別支援学級に入級させるための場所ではないこと、そこで学ぶのは通常の学級に在籍する児童であるので、基本は通常の学級での授業に意欲的に参加できるようにするための場所であることを周知し、そのためには、通常の学級との連携が重要であるという意識を広げること重点を置いた。

チャレンジルーム利用児童には、自尊心や学習意欲の低下が見られることが多いので、授業では、課題を明確にし、達成感を感じられるようにし、そこでの学習を楽しみに思える場所にすることを心掛けた。

エ チャレンジルーム担当者と学級担任・保護者との連携

がんばりカードで子供の頑張りを担任と保護者に伝えたり、支援ノートで担任と支援の仕方を連絡し合ったり、特別支援教育だよりで全教員へチャレンジルームの様子を広報したりして、連携を図った。

を使ってアセスメント検査をし、その結果を

チャレンジGo!Go!

特別支援教育だより
 平成21年9月
 第1号

このお便りを通して、チャレンジルームの様子や特別支援教育についての情報をみなさんにお伝えしていけたらと思っています。もしクラスで使えるネタがありましたら、使っていただけると幸いです。

チャレンジルームで、こんなことをしています・・・

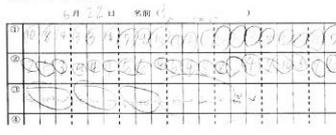
<集中トレーニング>

「見る」「聞く」力を高め、集中力を養うために、「集中トレーニング」を授業の最初にしています。トレーニングといっても、ゲームのような内容で、子どもたちは楽しく取り組んでいます。トレーニングの内容は、番卓姿勢を覚える、目と手を使って「見る」、「考える」集中力を高める、絵カードで「記憶力」を高めるなどいろいろありますが、1学期は「聞くためのトレーニング」をしました。

① 数字の聞き取り書き
2秒に1個の速さで20個の数字を読み上げます。子どもは、その数字を聞きとりながら書いていきます。慣れてきたら、聞いた数字に指定された数を足したり引いたりしながら書きます。例えば、言われた数字より2大きい数を書くという条件の場合、3と言われたら5と書きます。

② 言葉の聞き取り書き
2秒に1個の速さで5個の3文字言葉を読み上げます。子どもは、それを聞きとって書き写します。慣れてきたら、聞いた言葉から文字を抜いて書き写します。例えば、言葉の中に「き」の文字が出てきたら書きません。「ぼきん」は「ぼん」。

聞くトレーニング





<子どもの様子>
とても集中して聞いています。最初の5分に、このトレーニングをすることで、その後の活動への集中力も高まっているように見えました。意識して「聞く」という練習にもなっています。他のトレーニングもおもしろいので、またご紹介いたします。

この本にのっています。興味のある方は、声をかけてください。

特別支援教育だより

とても楽しいし、わかりやすいです。だから続けて良かったです。



子供

自信が付き、勉強が楽しいと思える気持ちになれる。



保護者

自信や意欲が高まって授業に臨んでいる。



担任

初めはクラスの子に馬鹿にされないかと心配したが、担任の先生がそういうところまで気を遣っていただき、チャレンジルームに行きやすいようにしてくださったので、楽しく行くことができたと思う。

チャレンジルーム利用関係者からの声

(3) 通常の学級における授業づくり

ア どの子にとっても分かりやすい授業の実践
「特別な支援が必要な児童に有効な手立ては、すべての児童に有効な手立てである」という考えの下、全校体制で、必要な支援を行っていくことを確認し合い、学級経営を大切に、分かりやすい授業づくりに取り組んだ。

チャレンジルームの児童に通常の学級でも同じような支援がされるように、通常の学級の授業において、特別支援教育の視点を生かした授業づくりを考えた。どの子にとっても分かりやすい授業、楽しい授業を目指して取り組んだ。



授業の流れを示す工夫

「座席の位置の工夫」「教材・教具の工夫」「集中力が続く工夫」「導入の工夫」「板書の工夫」など、今まで当たり前に行ってきたことを、さらに意識して授業を行うようにした。特に、視覚や聴覚、継次処理や同時処理の得手・不得手を考慮した情報の伝え方を工夫した。



黒板の使い方を工夫する

イ 授業のユニバーサルデザインとそのチェック表の作成

「学力の優劣や発達障害の有無にかかわらず、全員の子供が、楽しく分かる・できるように工夫・配慮された通常の学級における授業のデザイン」として「授業のユニバーサルデザイン」に全職員で取り組んだ。「授業のユニバーサルデザインの30ポイント」をチェック表にし、自分の授業を振り返ったり、研究授業で活用したりした。30のチェック項目を設定したが、全校で当たり前実践されるようになった項目については、項目から外し、「鬼崎南小学校スタンダード」としていく予定である。

授業の進め方	見通しをもち、安心して取り組める工夫をしましょう!
①	授業の最初に、本時の授業の流れを示す。(言葉、板書、カードなど)
②	課題を焦点化し、わかりやすく伝える。
③	活動の終わりと終わりの行動を示す(何を、どこまでするのか、終わったら何をするのか) 例: 時間を目に見える形に=スケジュール、時計、タイマー、タイムタイマーなどの活用 例: ゴールを示す=「～ができれば、座って待つ」「～をしたら、本を読む」
④	単調な授業にならないように、いろいろな活動を組み合わせ、授業展開を工夫する。
⑤	子供が作業をしているときに、指示や説明をしない。
⑥	机間指導の工夫をする。
⑦	授業の流れをパターン化したり、わかりやすくしたりする。
⑧	まとめ(振り返り)の活動を工夫する。 例: 板書のポイントやまとめの音読
⑨	選択できる状況作りをする。 例: プリントを選ぶ、活動を選ぶ
⑩	友達との協同学習。教え合う場を設定する。
⑪	動きのある活動を取り入れる。 例: ノートを書く、プリント、空書き、指書き、音読(立つ-座る)、授業の途中でプリントを取りに行く、配るなどの動ける時間を作る
学習環境の整備	集中できる環境を整えましょう!
⑫	必要のない物は片付ける指示を出す。
⑬	子供の視界に入る部分は、できるだけすっきりさせる。教室正面の簡素化。

ウ 指導案の工夫

下のように、指導案の書き方も工夫した。ユニバーサルの□、個別配慮の○を記し、ユニバーサルデザインと特別な支援が必要な児童への追加の手立てを書くようにした。

ユニバーサルデザイン30の一部

(4) 学習過程		時間	指導上の留意事項
段階	学 習 活 動		
つ	1 本時の学習課題をつかむ。 (1) 討論会の進め方を確認する。	4	□ 討論会の流れが分かるように、カードを提示する。 ○ 調べたことや考えたことなどを進んで発表するように意識付ける。
か	(2) 本時の学習課題をつかむ。 相手の意図を聞き取り、 自分の主張を伝えよう		
む	2 第1回戦目の討論会を行う。 (1) テーマを確認する。 「宿題はあった方がよいか、ない方がよいか」		
討	(2) 審判の判定項目を確認する。 ・意見のレベル ・初めの主張からまとめの主張への深まり ・議論の筋道に沿っていたか ・全員が発言したか ・相手の目を見て正しい言葉づかいで話したか		
論	根拠とともに自分の意見を発表し、討論会をしよう		
す	(3) 初めの主張をする。 ○ 「あった方がよい」派が主張する。 ○ 「ない方がよい」派が主張する。		○ 教師がタイムキーパーをする。 ○ 司会役に進行を任せる。 ○ その派の代表的な意見を述べさせる。 ○ 児童Aには、あらかじめ準備してある初めの主張を言わせる。
る	(4) 意見交換・質問をする。		○ 司会者にはできる限り話題の方向付けをさせる。

(4) 近隣の小・中学校等へのサポート

ア 発達検査の実施

市内の学校から WISC- の検査依頼があったため、本校に担任・保護者・児童に来てもらい実施した。検査結果の報告や学校生活への助言も行った。

イ 幼稚園・保育園との連携

夏季休業中に全教員で、幼稚園・保育園の園児の活動の様子を参観し、懇談会も行った。保育士の支援方法を学んだり、情報交換したりして、連携を深めた。



研修会での公開授業

ウ 「とこなめ教師力アップ研修」での講師

市内の通常の学級の担任を対象に「特別支援学級から見てくるもの～特別支援学級の授業研究を通常の学級に生かす～」と題して研修会を開催した際、授業を公開し、個別の教育的ニーズに対応する授業づくりについて大切なことを伝えた。

4 おわりに

(1) 成果

ア 特別支援学級担任がチャレンジルーム担当となり、通常の学級にいる特別な支援を必要とする児童への支援を、特別支援教育コーディネーターをはじめ関係職員と連携を取りながら、チームで進めることができた。そのことで、対象児童への多角的な理解が進み、かつ具体的な支援をすることができた。このことにおいて、人事交流で来ている養護学校の教諭の専門的な指導から学ぶことが多かった。また、スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカー・常滑市特別支援教育相談員などの専門性の高い職員と連携できたことも実際の指導に役立った。

イ チャレンジルームでの支援により、児童は自己肯定感を高め、チャレンジルームがもう一つの居場所となるほど、安心感と意欲をもって学習に臨むことができた。そして、チャレンジルームを運営するについては、時間割の工夫やその児童を支える周囲の教師・保護者・クラスの児童の理解、通常の学級の雰囲気づくりなど、学校全体での協力体制がとても重要であることが分かった。

ウ チャレンジルームに通う児童に配慮した授業から、チャレンジルームに通う児童も含むどの児童も分かる「授業のユニバーサルデザイン」へと校内研究が進んだ。まだ、研究の途中ではあるが、教師が意識して実践することで、児童が安心感や見通しをもって学習に参加することができている。

エ とこなめ教師力アップ研修、授業交流、発達検査、情報提供など本校が核となり、近隣の小・中学校等へのサポートを進めることができた。今後もニーズに応じてサポートし、近隣の小・中学校等の特別支援教育推進に協力していきたい。

(2) 持続可能な取組にするために

教職員は毎年変わっていく。そのため、新しく赴任した教職員にもどのような考えでどういう取組をしているかをしっかりと伝えていかなければいけない。また、サポート校研究の取組の効果を実感してもらうことが、何より「やってよかった」という気持ちになり、次に生かされると考える。

今後も学校としての方向性を継続できるように、これまでボトムアップで築いてきたものを、教師集団で正しく理解して、常によりよい支援について考えて進めていきたい。